

REED ORGAN

日本リードオルガン協会発行 ニュースレター

事務局；150-0011東京都渋谷区東1-4-26(株)川上楽器店 気付け
FAX；03-3409-4476

編集人；330-0072埼玉県さいたま市浦和区領家2-7-15 赤井 励
協会公式HP；<http://www.reedorganclub.jp>

E-mail；info@reedorganclub.jp 鶴田かず美, 遠山祥一郎

2010年10月1日発行；当協会の許可なく転載複製を禁じます

No.29

《特別寄稿》

「時雨螢舞う夢」、リードオルガンの叙情

松浦 伸吾

平成22年6月3日(木)、奈良女子大学構内佐保会館2階ホールで開催された「日本リードオルガン協会奈良大会リードオルガン演奏会 ～1300年目の風の音～」において、オルガニストの佐々木悠、大代恵の両氏により拙作「時雨螢舞う夢」が初演されました(写真1, 写真2)。「時雨螢」というのは私の造語です。そのような名前の螢は存在しません。時雨は初冬の雨、螢は初夏の虫。このふたつが同時に存在することは現実世界においてはなかなか有り得ないように思いますが、夢という個人的な世界の中であれば、音楽という抽象的な存在の中であれば、これらを併置しても差し支えないだろう、と考えました。「雨」や「螢」というものに触れた時、様々な感情が呼び起こされることが数多くあります。優しさ。悲しさ。暖かさ。切なさ。懐かしさ。時に絶望さえも。それらがあまりに物静かな姿を見せるために、自然と内省的思考へと向かわせるのでしょうか。そこには、少し触れるだけですぐに割れてしまう薄いガラスのような、脆くも美しい叙情が溢れています。リードオルガンの音色はそのようなものの表現に実に適している、と考えました。

委嘱のお話を頂いたのは一昨年の冬でしょうか。その時に伺ったお話に「演奏会場ではふたつのリードオルガンを使用する」という内容がありました。その時に、この両方を扱ったリードオルガン二重奏を作曲しよう、と思い立ちました。音楽のイメージが一瞬にして定まったことが大きな理由です。リードオルガンはその楽器構造から、発音のための空気の量を増減させることによって音の強弱を操作できます。またその増減を時間の経過と共に変化させることで、ゆるやかなクレッシェンドまたはディミヌエンドを加えることも可能です。このことはリードオルガンの演奏表現における大きな強みであると私は考えます。ただ、その効果は発された全ての音に対して反映されるため、ひとつの楽器では複数の声部を異なったダイナミクスやフレージングを用いて演奏することが困難です。しかしふたつの楽器を用いることによってその問題を幾分か解決することができるのではないか。時雨螢を表現するために、どうしても多声音楽を書きたかったのです。今思えば、複数のリードオルガンのための作品を書く、ということがどれだけ贅沢なことであったか、と。なかなか



写真1、松浦氏自ら委嘱作品初演、オルガンは大代恵会員(左)、佐々木悠会員(川上直義副会長撮影)

か得ることのできない貴重な経験を頂いたことを、とても嬉しく思います。

私はリードオルガンを一台所有しております。ストップの付いていない簡素なものです。過去に教育現場で使用されていたものだと思えます。大阪音楽大学大学院作曲専攻を修了する際の作品でこの楽器を扱い、その初演のために購入しました。その後は演奏の機会が無く、自宅で長い間眠っておりましたが、昨年、新しい日本語のうたの創作、既存のうたの紹介、うたと日本芸術の併置による空間デザイン等の活動を行う「泡沫会」が発足したことをきっかけに、リードオルガン演奏の機会を得ました。歌やピアノとの合奏はもちろんのこと、過去に生まれた美しい童謡や唱歌を、リードオルガンの伴奏で歌手と来場の方々が共に歌います。その音色に触れた方々から「懐かしい」「美しい」「切ない」といった声を聞く機会が数多くあります。その言葉は決して懐古の情から発せられるものだけでは無いはずです。リズムカルな、パワフルな音楽が世に氾濫する現代において、その叙情的な音は至極新鮮に響くのではないのでしょうか。

リードオルガンの音色が持つ雰囲気を中心から美しいと感じます。今後もこの楽器と関わっていくことになるでしょう。そして、その音をよりたくさんの方に届けることで、皆様がリードオルガンを「再発見」していただければ、と思います。



写真2、佐保会館を満席にした聴衆(和久井紀子会員撮影)